

AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

看護と情報 (2014.03) 21号:49～53.

闘病記分類に関する学生協働を通して

糸林 真優子

闘病記分類に関する学生協働を通して

糸林真優子

ITOBAYASHI Mayuko (Asahikawa Medical University Library), A Report of Tagging to Illness Narratives (Tobyoki) by Using the Original Check Sheet, with the Help of Student Assistants. *Nursing and Information* 2014;21: 49-53

キーワード：闘病記，学生協働，読書推進

I. はじめに

旭川医科大学図書館では、闘病記コーナーを設置している。設置にあたっては、本学独自の分類の作成を試み、この分類作業に学生の協力を得たため、その内容について報告する。

また、現在の本学学生のおよその読書傾向と、本学図書館が行っている読書促進活動についても併せて紹介する。

これらの内容は、平成25年8月に開催された日本看護図書館協会第45回研究会にて報告の機会を頂いた際の発表内容に加筆修正を加え纏めたものである。

II. 旭川医科大学の概要

旭川医科大学は昭和48年に設置された旧国立大学で、法人化に伴い国立大学法人となった医学部単科大学である。医学科6学年（平成26年度の入学定員は62名）、看護学科4学年（同50名）と、大学院博士課程・修士課程が設置されている。

図書館の主な利用者は、上記学部学生、大学教職員および附属の病院職員のほか、近隣の看護専門学校の学生や道内の医療機関の職員、一般市民等である。

III. 「闘病記コーナー」の設置

1. 経緯

近年、闘病生活を経験した患者あるいはその家族等が執筆した資料を収集する、いわゆる闘病記文庫が各図書館で次々と設置されているのは、既にご存じのことと思う。医科大学である本学でも、その教育・研究に対して与える効果を期待して、闘病記を収集してはどうかという提案が数年前から持ち上がっており、平成23年頃から当初予算として金額を設定し、資料の選定・購入を開始していた。

2. 国大協地区助成事業への参加

これとほぼ時を同じくして、平成24年度国立大学図書館協会の地区助成事業において、北海道大学が「学生協働活性化のためのシーズ開発」を提案するため、これに道内の他国立大学も参加しないかとの声かけられた。これに対し6大学がそれぞれ学生と協働できる活動を新規発掘あるいは促進するための事業計画を持って参加し、ワーキング・グループを結成することとなった。

本学では、ちょうど設置に向けて動き出していた闘病記に関連させた内容で参加することとし、事業名を「闘病記分類の学生協働と医学教育効果への期待」として計画を提出した。提出した事業計画はおよそ下記の内容であった。

事業の目的：将来の医師・看護師である学生に対して、患者の心情を理解する貴重な教育資料として闘病記を揃えた、闘病記コーナーを設置する。提供にあたり、利用しやすくするための分類を付与するが、この分類および広報を学生と協働して行い、闘病記コーナーの認知度向上と、資料の利用促進を図る。

事業の内容：他機関での闘病記コーナーの分類には、通常、タイトルから内容がわかりにくいという理由から病名が付されているが、本学では、教員からのアドバイスにより、患者の心情を理解するためにも、病名の他に患者の年代や背景等、本学独自の分類を多数付与することとした。分類作業のためには該当図書をある程度読む必要があることから、併せて感想・レビューも寄せてもらい、読む闘病記を選ぶための手がかりとして提供する。また、これらを纏めて紹介した小冊子等の広報物を作成する。さらに広報のため、闘病記コーナーにちなんだ記念イベントを開催する。イベントでは、闘病記を読むことで医療従事者にどのような効果が期待できるかと、闘病記コーナーの図書紹介をテーマとする。

3. 事業の実施

この項で記載する事業内容については、この事業の取り纏めとなった平成24年11月のワーキング・グループ報告会において報告した内容に基づくものであることをお

断りしておく。

計画に基づき実施した内容は、下記の通りである。

- ①平成23年7月 闘病記コーナー（仮）設置
- ②同月 闘病記コーナー・サポートチームメンバー募集開始
- ③平成23年7～12月 分類（タグ付け）項目の検討，書式（チェックシート）作成
- ④平成24年1～5月 「闘病記を読んで，貰えるキャンペーン」
- ⑤平成24年2月 闘病記コーナー開設記念講演会『患者の「語り」を知るために～闘病記を読むということ～』
- ⑥平成24年4月 第2回闘病記コーナー講演会『患者の「痛み」を分かるために～がん看護と闘病記～』
- ⑦平成24年9～11月 「闘病記を読んで，貰えるキャンペーン 第2弾」

ある程度の資料数が揃ってきた頃を見計らい，闘病記コーナーの仮設置を行った。まだ「闘病記コーナー」という名称すら仮称で，具体的なイメージも固まっていない段階であった。

同時に，闘病記コーナー・サポートチームメンバーと名付けて協力者を募集した。これは未所蔵の闘病記の情報提供や，分類作業を手伝ってくれる学生を募ったものである。この募集の際には，どういう分類を付与すればより利用してもらいやすく，また手にとってもらいやすくなるかといった内容も含めて一緒に検討してくれる学生が手を挙げてくれることも期待していた。しかし，残念ながらこの段階での協力者を得ることはできなかった。

2度開催した講演会は，いずれも3名の本学教職員に依頼し，患者との関わりや自らの闘病経験，闘病記の紹介等について話して頂いた。メインターゲットに設定した学生の参加者は少数ではあったものの，どちらも30名程度の参加があり，好評を博した。

「闘病記を読んで，貰えるキャンペーン」は，事業への参加によって割り当てられた予算を利用して，一定の条件を満たして分類作業を行ってくれた学生に謝礼として図書カード等の金券を支払うという内容で広報を行ったものである。条件は5冊の闘病記を読み，A4サイズの両面に分類（本学ではタグ付けと呼ぶこととした）内容の記載されたチェックシート（図1）各1枚，計5枚を提出し，そのうち最低2枚以上にはレビューも記載することである。

【図1】タグ付けチェックシート

2度に渡り実施したキャンペーンの結果，得られた協力数は下記の通りである。

タグ付け終了数（395冊（H24. 11. 15現在コーナー冊数）中）：1回目151冊，2回目172冊

協力学生数：1回目24名（他，教員1名），2回目18名（他，期間外1名）

1回目の募集期間は，春休みを跨いだこともあってか，医師国家試験を終了した後の医学科6年の学生も参加してくれたことが印象深い。2回目の募集期間ではほぼ低学年であり，特にまだ学生生活に比較的余裕のあるとみられる1，2年生が多い結果であった。

これらの事業内容の実施によって，闘病記コーナーの存在に対する認知度はある程度得られたと考えられる。また実際に闘病記を読んでもらった学生においては，当初の動機はどうか，読書促進効果や，患者・医療に対する意識の向上あるいは関心を向けるきっかけとなったのではないかと期待している。これらは提出されたレビューに記載された「闘病記を読む機会になって良かった」「患者の苦しみを知ることができた」「医療者が患者に与える影響の大きさ」「患者に対するサポートの必要性」といった文面からも推察することができる。さらに，今回タグ付けしてもらった内容を資料の装備に反映すれば，それを手にとって読んでみようかという関心を誘発できるのではないかと考えている。

さて，事業内容を実施してみたいうえでは当然ながら問題点も多くあった。

特にタグ付け作業においては，さらなる協力者数を得るための広報の工夫や，病名の不統一に対する対策など，検討しなければならないことが多数浮かび上がった。盲点だったのはボールペンでと指示しているにも関わらず鉛筆での記入が多かったことで，チェック

シートの紙面をを取り扱ううちに擦れて薄くなってしまいうため、注意が必要となっている。

レビューの記入が少ないのも大変悩ましい点である。キャンペーンではアルバイト感覚で最低限の枚数のみに記入し数口分の金券を手に入れた学生が多数おり、条件以上の枚数にレビューを書いた学生はほんの一握りであった。それでも読んでくれただけ良かったと前向きに捉えるべきなのか、そもそも金券を謝礼にすることをほろ苦く思っていた身としては、合理的な学生の行動に苦笑いするほかない。しかしながら試験期間には寝る間も惜しみ夜通し勉強している姿をみるにつけ、よほどの読書好きでもなければ対価やメリットなしに医学部生に協力を求めるのは難しいことなのかもしれないとも考えてしまう。

さらに頭を悩ませている問題が、タグ付け結果内容の資料装備への反映方法である。現在は仮の処置として、背に通常の請求記号ラベルとその上部に「闘病記」と記載したラベルを貼り、タグ付けが終了したのものには裏表紙見返しの上から天にはみ出すようにして「チェック済み」の付箋を貼り、さらに、タグ付けの際にはここはぜひ目を通すべきだと印を付けてもらったページにも天にはみ出して付箋を付けている。見栄えの点からも取り扱いの点からも好ましいとは言い難い状態であるうえに、背には病名も追加したいと考えているため、今後ラベルや装備に工夫が必要なのは明らかなのだが、なかなか良いアイデアが浮かばず苦戦している。

4. 事業終了後の進捗と今後

事業としての活動は終了したが、闘病記コーナー自体はもちろん継続していく必要がある。現在は残念ながらマンパワーの都合で闘病記関連の作業や広報は滞りがちなのが現実であるが、何とかして進めていきたい。今後の予定としては、①レビューを取り纏めた小冊子等の発行、②タグ付けに協力してくれる学生（ボランティア）の確保、③学生に広報活動に参加してもらう方法の模索、④資料装備への反映方法、⑤タグ付け結果の何らかのデータベース化の検討、⑥webフォーム等のより軽負担で気軽にタグ付けに協力して貰える方法の検討、等を計画しており、実現したい内容は尽きない。

IV. 本学学生の読書状況

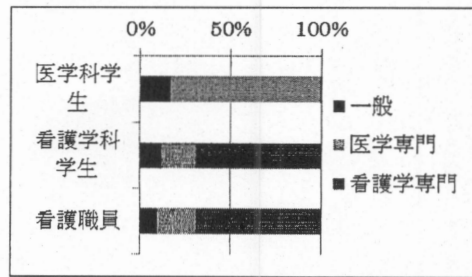
今回研究会において発表させて頂くにあたり、研究会のテーマが「看護と全人教育」であったため、おそらく図書館が最も手堅く全人教育に貢献できるであろう活動

内容たる読書推進について触れたい。

まず先に述べた事業での活動以後、闘病記がどれだけ利用されたのか貸出冊数を調べてみた。キャンペーンを終了した平成24年11月22日から平成25年7月31日までの貸出数は、医1年8冊、医2年4冊、医3年2冊、医4年3冊、医5年4冊、医6年3冊、看1年10冊、看2年0冊、看3年4冊、看4年4冊、教員1冊、看護職員4冊、医療技術職員1冊、事務職員7冊、学外医療職員1冊という結果であった。事業を実施する前と比較すれば、とりわけ増加したとは言い難い数字である。

では、本学の学生は普段、一体何を読んでいるのだろうか。

闘病記コーナーを設置した平成23年6月1日から平成25年7月31日までの約2年分の貸出履歴から抽出した読書傾向を見ていく。なお、以降の数値・グラフは正確な統計では無く、あくまでも大まかに集計した概数であることをご了解頂きたい。



【図2】 分野別貸出数の割合 (学科別)

図2は、医学科と看護学科のそれぞれの学生と、看護職員について、図書館から借りた図書分野の割合を示したグラフである。看護職員というのは技師などを含まない、ほぼ看護師のみを対象としている。

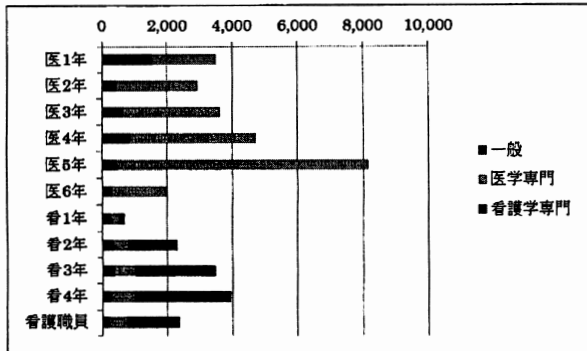
医学科の学生は8割以上が医学専門の図書のみ、看護学科の学生と看護職員については、ほぼ9割が医学専門、看護学専門の図書を占めているのが分かる。

図3は、学年別に分けたものである。先ほどのグラフは割合であったが、こちらのグラフは冊数である。約2年分の数字であるため、この半分がおよそ1年間の貸出数ということになる。

貸出冊数としては医学科5年生が突出して多くなっているが、ほとんどが医学専門の図書である。臨床実習をしながら、進級や医師国家試験・卒業資格に向けて勉強に勤しんでいるのであろうことが伺える。

医学科6年生になると、講義自体は少なくなり、ひたすら医師国家試験に向けての対策に打ち込むようになる。

図書館の利用方法としても机だけがあれば良いというような雰囲気になってくるため、貸出冊数が目に見えて激減しているのが実情とよく一致しているのが分かる。



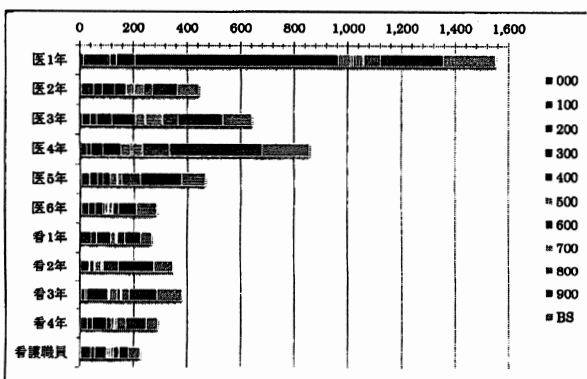
【図3】 分野別貸出数 (学年別)

一般書を読んでいる割合でみると、医学科1年が貸出数の半分弱と多めになっているが、これについては次のグラフで触れる。

看護学科の学生では、1年生の貸出数が極端に少なくなっているが、この理由は不明である。カリキュラムとして図書館の資料がそれほど必要でないのか、あるいはテキストとして自分で購入しているのか、機会があれば学生に尋ねてみたいと思っている。2年生になると打って変わって看護過程や看護技術の資料の貸出が増えているが、これは実習が始まるなどして必要に迫られてだろうか。どちらにしても、看護職員も含めて看護の学生は、一般書の利用割合が少ないのが見て取れる。

図3の一般書部分のみを抜き出し、NDC別にしたのが図4である。

医学科1年生では、400番台の数学、物理、化学、生物といった自然科学の基礎学習分野が大部分を占めている。100番台の中では心理学、800番台では英語学習関係



【図4】 NDC分類別貸出数 (学年別)

が多く利用されており、300番台のジェンダー論に関わる分野もやや多く利用されているようである。

なお、表中のBSというのは文庫と新書のことである。本学ではこの2種類は内容で分類しておらず、判型でひとくくりのコーナーに配架しているのだが、書名で確認していくと上記と同じような割合で、趣味の読書と言うよりは学習するためのものが多く利用されていた。これは全学年に共通した傾向であった。

ちなみに国内小説の913.6で多かったのは、海堂尊の「チーム・バチスタシリーズ」、夏川草介の「神様のカルテ」、村上春樹の「1Q84」、東川篤哉の「謎解きはディナーのあとで」で、1年生の次に900番台の利用が多い医学科4年では、このベスト4に加えて伊坂幸太郎が人気だったようである。ただ、小説を多く借りているのは各学年に数人ずつ存在する本好きの学生であり、全く借りないという人と二極化している傾向が見られた。

看護学科はというと、冊数は少ないながら、こちらも医学科と同じく、心理学、自然科学、英語学習関連が比較的多い傾向であった。ただし文庫・新書内に関しては、医学科に比べると若干ではあるが小説類が多いようである。また看護の3・4年生では、300番台の社会科学系統が2年生までに比べて急に増加している。これはカリキュラムの構成のほか、保健師等を目指す学生が社会福祉等について学習するようになっていくのを反映しているのではないかと考えられる。

看護職員についても、看護の学生とほぼ同じような内訳である。強いて言うなら、「敬語の使い方」や「コーチング」など、いかにも社会人らしい自己啓発本が少し含まれている点の違いと言えるだろう。

このように見ていくと、学生も看護職員も、ほとんどが勉強することに熱心であり、趣味あるいは教養のための読書にまではなかなか時間を割くのが難しいのが現状だと言えそうである。

V. 本学での読書推進の取り組み

ここで、読書推進のために本学が実施してきた内容を少しだけ紹介したい。

- ①ブックハンティング…概ね年に2回、学生とともに書店に赴く選書ツアーを実施している。募集人数は最大8名で、実際の参加は3~4名であることが多いが、参加者の満足度は高く好評である。
- ②ミニ展示コーナー…上階への階段正面にある空きスペースを利用し、年に数回程度テーマを設けて資料を紹介するミニ展示を実施している。

③蔵書交換展示（通称「ややや！」）…道内の単科大学同士で、互いの得意とする分野の蔵書を100冊ずつ交換貸出し合おうという企画で、小樽商科大学との間で開始したものである。平成25年度には帯広畜産大学、北見工業大学との間でも実施した。

④旭川市図書館との相互貸出…本学図書館では市図書館と連携協定を結んでおり、互いの蔵書を郵送貸出可能としている。

その他にも継続はしていないが、ブックツリーやスタンブラリー、また学生から協力依頼を得てピブリオバトルを実施するなど、機会があるごとに企画・実施している。しかしながら、このように様々な試みを行っているものの、どれもそれほど大きな成果を上げているとは言いがたいのが現実である。幸いブックハンティングで選書されてきた本だけは非常に貸出率が多いため、今後も継続しつつ、また他にも工夫していければと考えている。

VI. おわりに：「全人教育」のために何ができるか

全人教育の定義を掘り下げようとする際、際限が無いので割愛するが、研究会の案内文書の中に「①優しさと思いやり ②受容性 ③協調性 ④主体性 ⑤前向き ⑥コミュニケーション力を持った「豊かな教養や倫理観に基づく看護的実践を展開できる医療人」を育てるお手伝い」という一文が書かれていた。このような優れた人間性を持った学生を育てるためには何が必要だろうか。もちろん読書だけで足りるはずはないし、読書数を増やし専門分野以外の教養を身につけられたとしても、本来の勉学が疎かになるようでは本末転倒である。

そこで、本当にささやかではあるのだが、図書館とし

て個人として、人間性を高める手助けができるかもしれないという内容について捻出してみた。

まず一つ目は、使ったものは元に戻せるように指導するということである。これは全く個人的な感想なのだが、おもしろいことに、本学の病院で評判のいい診療科の分野は不思議と書架の乱れが少なく、あまり評判が良いとは言えない診療科の分野の棚は、なぜか乱れるのが早いように感じられる。まったく関係ないようにも思えるだろうが、自分で使った資料は分類ラベル通りに几帳面に戻すように日頃から習慣を見直してもらえれば、患者の腹中に術具を置き忘れるような医療ミスも減らせるのでは無いかと、案外本気で最近では考え始めている。

二つ目は、ルールを守れるように、これも利用指導を行うということである。飲食であったり座席の占有であったり盗電であったり、利用規則は各館によって様々ではあるが、誰も見ていない場合であっても決められた規則は守るという一般的な道徳観念は維持できるようになって欲しいと考える。

三つ目は、相手を不快にさせない程度の挨拶ができるように促すことである。笑顔で元気に自分から声を出して欲しいとまでは求めないが、誰かから挨拶をされた際に、仏頂面で無視をしたり、いかにも煩わしげに睨み付けたりするのではなく、せめて普通の顔で軽く会釈するくらいはして欲しいと思うのが通常感覚であろう。学生が卒業した後、患者相手であればきちんとできると自分では思っているが、こういうことは意外と普段何気なくしている態度が、咄嗟に出てしまうものだと考える。非常に地味で些細なことではあるが、カウンターから気持ちよく挨拶するように心がけて、学生の人当たりが少しでも良くなるきっかけになればと思っている。